

蓑虫の動悸

作・小佐部明広

【登場人物】

私

男 1

女 1

女 2

男 2

女 3

女 4

【舞台】

うすく水がはってある床。

水に浮かぶベンチ。小さな骨組みだけの建物。

そして、中央後方に、

大量の木材が乱雑に組み合わされている物体。
まるで、ミノムシのミノのようである。

例えば、このミノを通して光が注げば、
木漏れ日のようになるかもしれない。

プロローグ

私は、この日、いつも通勤している会社の事務所にいかなかった。昨日、帰宅してそのまま眠ってしまったようで、気づいたら昼間だった。こんなことは今まで一度もなかった。

私は、このまま事務所に行かないことを考えた。そうすれば、なにかが変わるかもしれないと思った。

結局、行くか行かないかを決められず、着の身着のまま、ぼんやりと駅の方角に向かっていくことにした。

私が、ゆっくりと歩いて、舞台上に出ていく。

街の人々が見えてくる。

スーツを来ている者、学生、職場の制服を着ている者、主婦のような者、恋人たち。

社会的なものが、うろろと歩き回っている。

私たちは、社会で、常に、自分が社会的に何者であるか、ということ問われているように思う。

しかし、私が社会的に何者であるか、というよりも前に、私は、私である。

私から社会的なものを取り除いたとき、私は、何者か。

私の目に、白い布が落ちてるのが見える。

服のようである。ワンピースだろうか。

髪飾りらしいものも落ちている。

私は、シャツのボタンに手をかけ、ひとつひとつボタンをとっていく。ボタンをはずしきり、スカートを脱ぐ。

シャツを羽織ったまま、ゆっくりと、白いブラジャーをはずす。

客席には背を向けたまま。

私が、羽織っていたシャツをはずすと、裸の背中がさらされる。

私は、白い布を着てみる。

すると、さつきよりも、私が、私であるような感覚になる。

髪飾りもつけてみる。

それを見ていた、社会的な人々も、自分の衣装を脱ぎ始める。

中には、すでに白い布を着ている。

ひとりがカゴを持ち、脱がれていった服を入れていき、そのまま奥へ去って行ってしまおう。

もう、彼女たちが、社会的に何者であるかは、わからない。

舞台には、私を除き、男が二人、女が三人。

男1は、あてもなくフラフラしている。

女1は、足を動かすたびに水が動くのを楽しんでいる。

女2は、どこか遠くを眺めている。

男2は、耳をすませて水の落ちるところに向かっていく。

女3は、うつむいて座っている。

私は、誰かに近づこうと、歩き始める。

基本的に、動作はきわめて遅いテンポと、沈黙のうちに表現される。

【1】

1. 人探し

天から一筋の水の流れ

私は 周りの人間を 見る

目をつむっている男(男2)

ふらふらと歩いている男(男1)

私は 利己的そうな女(女2)

汚い女(女3)

無邪気そうな女(女1) が目に入る

私 女1に近づく おそろおそろ

女1 水の動きに夢中で 気づかない

私 これ以上 女1に近づけない

私 手を出して 気づいてもらおうとするが

これ以上 手を出せない

男1 女1に近づいている

男1 女1の肩に手を触れる

女1 男1に気づく

女1 足を動かす
水が動くのを 男1に見せる

男1 同じように足を動かしてみる
水は同じように動く

女1 足を さつきとは違うように動かす
水は さつきとは違うように動く

男1 女1と同じように動かす
水は 同じ動きをする

女1と 男1は それを繰り返している

それを見ている 私
ここにはもう入れない

私 男2を見る
私 男2に向かって歩く

女2 男2に近づいてきている
私 立ち止まる

女2 男2の腕をつかむ
男2 立ち止まる

女2 落ちている水の下に手を差し出す
水が落ちる音 きこえなくなる

女2 足裏で地面の水を軽くたたく
もういちど たたく

男2 同じように足裏で地面の水を軽くたたく

女2 もういちどたたく
男2 もういちどたたく

男2 目を開く

女2 男2を見て 微笑む

女2 水を遮っていた手を はなす

水は 再びそのまま地面に落ちる

水の落ちる音 きこえる

男1と女1 ベンチに座っている

男2と女2も ベンチに向かう

その様子を見る 私

私 女3を見る

女3 ずっとうつむいている

私 ベンチの近くにむかって 恐れながら歩く

男2と女2 ベンチに座る

私 ベンチの近くに立つ
自分の爪をかむ

女1と男1 足で水を鳴らしている

女2 男2の腕に触れている

私 それを眺めている

2. 少女時代

水の落ちる音 聞こえなくなる（明かりが変わる）

私 少女時代の風景を思い出す

女2と男2は 話している

なにを話しているのかは ほとんどなにもききとれない

女2 ミノムシってずっとミノの中でひとりで生きてんだって。

男2 それ、耐えられないな。

女2 メスは、オスが飛んでくるのをずっと待ってるんだって。

男2 へえ、来なかったらどうなるの。

女2 ひからびてそのまま死ぬんだって。

男2 それ、バカだよな、人間だったら。

女2 ただ待ってるだけ。女だからって甘えてんのよ。

私 親指を唇でかみながら 男1と女1に近づく
二人 気づかない

女2 私に気づき 話すのをやめる

不快そうに見ている女2

私 女2を見る

女2 一瞬目が合うが 無視する

私 女2に近づく

女2 私から遠ざかる

私 もういちど女2に近づく

女2 私に水をかける

女2 男2を連れて ベンチから離れていく

私 爪をかむ

男1 私がいることに気がつく

女1も 気がつく

男1と女1 なにげなく ベンチから離れていく

私　ひとり　爪をかむ

3. 動悸

水の落ちる音　聞こえてくる（明かりが変わる）

私　手を自分の左胸にあてる

脈拍が　速くなっているのを感じる

呼吸も　速くなっていることに気づく

苦しくて　息を吸って　呼吸を整える

右手を左胸に残したまま

左手を右胸にあてる

息をする

私　座り込む

目をつむる

右手で　自分の頭をなでる

左手の親指を　口にくわえる

右手で　左腕をなでる

そのまま　私の体をつたって　太ももをなでる

親指を　口にくわえたまま

右手を　太ももにはさむ

太ももを　わずかに動かし続ける

自分の親指に　何度も口づけしながら

しばらくして　私の動きは止まる

目を開ける

さっきと同じ風景が見える

なにも変わっていない

なにも変わらない風景

ぼんやりと眺める

男1　私の背後から　近寄ってくる

私の肩に　手を触れる

私　男1に気づく

男1　足を動かして　地面の水を動かす

私　ただ見ている

男1　もういちど　足を動かす

私　ただ見ている

女1がやってくる

男1と同じように足を動かす

男1 同じように足を動かす

私 ただ見ている

女1 私の手に触れる

私の手を 動かす

私の手 両手のひらが上に向き 茶碗のような形

女1 水をすくう

手を 私の手の上にもってきて 手を離す

水 落ちる

私の手のひらの中に 水がたまる

男1 私の手のひらの下に 両手のひらをもっていく

私 手を離す

水落ちていく

男1の手のひらに 水がたまる

男1 手をそのまま上にもっていく

女1 男1の手の下に 手のひらをもっていく

男 手を離す

水 落ちる

女1の手のひらに 水がたまる

私 女1の手の下に 手のひらをもっていく

女1 手を離す

水 落ちる

私の手のひらに 水がたまる

それを 繰り返していく

女1 手にたまった水を 自分の頭にかける

みんな 笑う

私 女1の頭をなでる

女1 男1の頭をなでる

男1 私の頭をなでる

女1 右手で 私の左手をとり 自分の左胸にあてる

左手を男1に差し出す

男1 女1の左手を 右手でとり 自分の左胸にあてる

左手を私に差し出す

私 少しの戸惑いはあるが

男の左手をとり

ゆっくり ゆっくりと近づけ

私の左胸にあてる

水の落ちる音 聞こえなくなる

(音楽1)

【2】

4・愛らしい女

女2と男2 女3の近くにいる

女2 女3の近くで 臭いをかいでいる

女3から 嫌な臭いが出ているようだ

女2 女3に水をかける

女3 黙って座っている

女2 もういちど女3に水をかける

女3 黙って座っている

女2 男2を見る

男2 水をすくう 女2を見る

女2 男2を見ている

男2 女3に水をかける

女3 ずっと黙って座っている

それを見ている 私

赤い服を着た 愛らしい女(女4)

やってくる

女4 ベンチに腰掛ける

女4に寄っていく男1 女1 男2 女2
それを見ている 私
また ひとり

私 女3が目に入る
女3のところへ 歩いていく

女1 手で女4の顔に触れる
女4 自分の顔に触れている女1の手の甲を なでる
嬉しそうに

男1 女4の頭の近くに 手を差し出す
女4 男1の手に 頭を寄せる

私 女3の前に立っている
女3 私を見て また目を伏せる

男2 右手を自分の左胸にあて
左手を 女4の左胸にあてる
女4 おどろいている

女2 男2の左手を 女4の胸からはなす

女4 男2の左手をとり
自分の左胸にあてる

私 女3を抱きしめてあげる
自分よりもみじめで 愛おしく感じる

愛らしい女は去っていく

女2 男2の手を引き 座らせる
手のひらで 男2の顔面をつかむ
顔面をつかんだまま 男2を倒す

女2 男2から離れていく
男2 倒れたまま

それを見ていた私 男2に近づく

5. 回想と空想

水の落ちる音 聞こえなくなる (明かりが変わる)

私 立っている
男2 座っている

私 昔の恋人のことを思い出す

男2 ミノムシって、ずっとミノの中でひとり生きてんだって。

メスはオスが飛んでくるのをずっと待ってて。

なにかの拍子でミノから落ちちゃうと、

もう二度とミノの中には戻れなくて、

地面でモゾモゾ動いてるのを誰にも見つけてもらえなくて、

そのままひからびて死んじゃうんだって。

落ちなくても、オスが来てくれなかったら、

そのままミノの中でひからびて死ぬんだよ。

メスの方からも来てくれればいいのに。

私 男2に近づいてみる

男2 オスは、メスと交尾したら、そのままひからびて、

ミノの一部になるんだって。

どっちにしろ、嫌だな、そういうの。

ごめん。

男2 私のもとから去っていく

私 左胸に手をあてる

息を整える

男1と女1がやってくる

女1 私の背中をさする

男1 私の頬を手でつつみ 涙を拭いてくれる

私 空想にふける

もし この男が私を愛してくれたら

水の音が聞こえてくる

女1 離れていく

私 右手で 男1の指に触れる

私 男1の指を 軽くつかみながら指でこする

男1 同じように 私の指を軽くつかむ

私 男1の手をとり

両手で少し上に持ち上げていく

私 男1の指に口づけをする

男1 同じように私の手を取り

私の指に口づけする

男1 私の親指を 私の口元にもっていく

私 自分の親指に口づけする

男1 その親指を 今度は自分の口に近づけて
私の親指に 口づけする

見つめ合う 二人

男1 私を 倒すように寝かせる

男1の顔 私の顔に近づく

男1 私の口に親指をあてて
私の頬に 口づけする

水の音 聞こえなくなる

しばらく動かない二人

水の音がきこえてくる

女1 戻ってくる

私と男1 起き上がる

女1 私の背中をさすっている

男1 私の頬を手でつつみ 涙を拭いてくれている

私 空想から覚めている

去っていく 女1と男1

私 自分の親指に口づけをする 目をつむって

6・犯される

(明かりが変わる)

私 左手の親指を 口にくわえる

私 右手で左腕をなでる

そのまま 私の体をつたって 太ももをなでる
親指を口にくわえたまま

右手を 太ももにはさむ

太ももを わずかに動かし続ける
自分の親指に 何度も口づけしながら

女2 私のそばに立っている

女2 私の頭に触れる

私 女2に気づいて 身構える

女2 私の後ろから 抱きしめるように手を動かし

右手は 私の服の中に入っていく 左胸をなでる

私 服の上から 女2の手を おさえる
私 息を整えようとする

女2 手を服から出す
私の正面にしゃがみ 私と目を合わせる

女2 私の足先に触れる
手は 足をつたって 私のふとももの裏をなでる
私 自分の親指を 唇でかんでいる

女2 自分の顔を 私の顔に近づける
女2 立ち上がる

女2 指を2本立てて わずかに動かしている

私の親指を 唇からはずして
女2 私の口に 2本の指を 入れる

水の音 聞こえなくなる

女2 2本の指を わずかに動かしている

女2 少しして 2本の指を私の口から出す
私 息を整えようとする

女2 また同じ指を 私の口に入れる

女2 私の手を取り 私の2本の指を 自分の口に入れる

女2 口を離し 指を離し 私に笑顔を向ける
私 目を伏せている

女2 去っていく

男1と女1 私のもとに歩いていくる

女1 足を動かす 水が動く

男1 同じように足を動かす 同じように水が動く

私 男1と女1を見ない

女1 私の手を動かす

私の手 両手のひらが上に向き 茶碗のような形

女1 水をすくい上げ 私の手のひらの上に落とす

私の手 隙間ができていて 水 隙間から落ちていく

女1 私の手を動かし 隙間をなくす

男1 水をすくい上げ 私の手のひらに落とす

水 やはり私の手の隙間から落ちていく

私 うつむきながら立ち上がる

男1と女1 私を見ている

私 男1と女1から離れていく

7. 髪飾り

私 女3のもとへいく

水の音がきこえてくる

私 女3の頭に触れる

私 女3の後ろから抱きしめるように手を動かし

右手は 女3の服の中に入れていき 左胸をなでる

女3 なにもしない

私 手を服から出す

女3の正面に座しやがみ 女3と目を合わせる

私 女3の足先に触れる

手は 足をつたって 女3のふとももの裏をなでる

私 自分の顔を 女3の顔に近づける

つまらなくなつて 私 女3から離れようとする

女3 私の手をつかむ

私 女3を抱きしめてあげる

私 頭につけていた髪飾りを 女3に渡す

女3 髪飾りをつけてみる

私 女3から離れて行く

建物の後ろに 男1と女1がいるのが目に入る
腰のあたりは 隠れて見えない

女1 男1の頬に 手をあてる

女1 男1の手をとって 自分の頬にあてる

男1と女1 見つめ合っている

女1 男1の首に 口づけする

女1 男1の左胸に 手をあてる

女1 男1の手をとって 自分の左胸にあてる

女1 着ている白い布を 脱ぐ

男1 同じように脱ぐ

女1 ふたたび男1の手をとって 自分の左胸にあてる

女1 自分の手を 男1の左胸にあてる

女1 男1の体を自分に近づける

男の胸と 女の胸が 密着する

相手の鼓動を感じる 二人

水の音 きこえなくなる

それを見ている 私

二人の息の音がきこえる

私 それをききながら 二人に背中を向けて座る

男1と女1 笑顔を向け合う

二人は白い布を着る

二人は歩いて 背を向けている私を 見つける

女1 私を笑顔で見つめている
男1 固まる

水の音がきこえてくる

女1 足を動かして 水を動かす

二回 三回

女1 私の手に触れる

私 力なく笑顔を向けて

二人のもとを去っていく

ひとり

※無料版はここまでです。ご覧くださりありがとうございます。全編はクラアク芸術堂の販売ページ（左のURL）から購入できます。ありがとうございます。

<http://www.clark-artcompany.com/public>

あとがきと解説

時代が進むにつれて、僕たちの私生活や仕事は、どんどん速いスピードになっっているらしい。速くなければ「効率が悪い」し、即戦力でなければ「使えない」し、ネット社会で個人に入ってくる情報がどんどん増えているので、それを速いスピードで処理できなければ「追いつかない」。なるべくスピードで手軽なものが好まれる傾向にあるという話もきくし、僕もネット上で動画を見るときは、時間が長いと「みるのやめようかな」と思ってしまうし、文章が長いと「面倒くさいな」と思ってしまう。しかし、スピードが速くなったことよって、僕たちが豊かになったのかと問われれば、それはよくわからない。ともかく、時代は「速いもの」が求められているらしい。

これは芸術にとっては不利な時代だと思う。とかく芸術には「時間がかかる」からだ。多くの作品が、ぱっと見たときに「よくわからない」。よくわからないけど、なにか興味がひかれる。なぜだろう？ そういうことを考えて感じて、ようやく、「あ、こういうところが好きなのかもしれない。」なんてことがわかったりする。そのときにわかればいい方で、場合によっては、数カ月後、数年後にわかることすらある。芸術とはそういうものが多いので、現代の流れとは逆行している。僕が長い動画を見て「みるのやめようかな」と思うように、ぱっと見てよくわからなかったら、「もういいや」となってしまうのである。

しかし言い換えれば、そんな時代だからこそ芸術が必要になる、とも言えると思う。速くなることよって、僕らが見落としているものがあるだろう。いつも急いで通っている道をゆっくり散歩してみると、「あ、こんなところにお店があったんだ」とか「実はいい景色だな」とか気づくことがあると思う。芸術の役割もそれに近いものがあると思う。普段、見落としてしまっているもの、当たり前だと思っているものを再発見し、今まで住んでいた

現実世界に、新たな視点を加えてくれたりする。そうすると、今まで見ていたはずの景色が、とても新鮮なものに感じられるかもしれない。

舞台作品のスピードも、どんどん速くなってきていると言われている。おそらく60年前に上演されていた作品と、現代の作品では、(もちろん作品によつて異なるだろうが)速いテンポで上演される傾向にあると思う。しかし、今回のこの作品は、極めて遅いテンポである。速いテンポに慣れている観客はイライラするかもしれない。だが、遅いテンポによつて、僕たちが見落としていたものが、見えてくるのではないかと思う。それは例えば、ビデオカメラで撮った映像を、スローで再生してみると、今まで知らなかった世界が見えることがあるということに近いかもしれない。

さて、今回は「孤独」の作品にしようと思った。この台本を書いている今、一番興味のあるテーマだった。「孤独は山になく、街にある。」という言葉がある。孤独は、他人がいてはじめて感じるものだとことだろう。疎外感と言い換えてもいいかもしれない。個人的な体験だが、ゼミのメンバーで、ゼミのあと飲みに行こう、という会が開かれたとき、大学から店に行くまでの道、僕だけがひとり歩いていった。ほかのゼミのメンバーは、みんな誰かと一緒に歩いているのに。あのととき、久しぶりにとってもみじめな気持ちになったことを覚えている。ケータイの画面を見たり、なにか別の考え事をするによつて、気を紛らわせようとしていた。昔から、とても人見知りで、学校に友達もいなかったもので、たびたびそのような感覚になることがあった。

この作品は、基本的には「私」の心象風景からなる。感覚的な世界だったり、願望の世界だったり、回想の世界だったりする。セリフはほとんど発せられず、その代わりに「触れ合う」という行為を多く書いた。黙る。触れる。例えば、相手にたくさん言葉を投げかけるよりも、相手の頭をなでる方

が、相手に安心感を与えることができるかもしれない。黙る。触れる。その方が、僕たちに大きなものを与えてくれるかもしれない。

太田省吾という演出家の「沈黙劇」を知ったのが、今回の作品の発端だ。映像でしか見たことがないが、登場人物は一言も喋らず、かなりゆっくりと動く。言葉を喋らないといっても、ダンスやパントマイムではない。行為自体は、歩いたり、座ったり、という日常的な動作。それが、とてもゆっくりと行われていく。こう書くとしても退屈そうな印象だが、僕はずっと見ていくことができた。「これはすごい、いつかやってみたい。」ということで、今回ようやく、そのような台本を書くことになった。

私たちは社会に生きているとともに、生き物として生きています。言い換えれば、社会的存在であると同時に生命的存在だということだ。しかし私たちが自分は何者かと考えるとき、名誉や業績などの社会的な枠組みの中で考えってしまう。しかし、社会的な枠組みで見て「つまらないもの」が、実は「人生の中で重要なもの」だと気づく瞬間がある。そこでまず社会的な作組をなくして、生命的存在としての人間を描いていこう、ということにした。そのため、人物たちは、最初に社会的存在としての衣装を脱がされる。

さて、この作品はセリフがほとんどない。作品のほとんどの部分が沈黙のうちに行われていく。なぜ沈黙をするのか。ひとつには言葉への疑いがある。多くの人が、演劇の中心は言葉（セリフ）にあると思っているだろうと思う。しかし、最近、コンテポラリーダンスなどを見る機会がいくつかあり、僕が最も感激した舞台芸術を3本あげると言われれば、3本とも、いわゆる演劇は選ばれず、コンテポラリーダンスやサーカスを挙げることになると思う。つまり、身体というものにとっても興味に向いている。

人間は、言葉を語るよりも先に、まず身体が存在している。「(在る)」ということは常にわれわれを驚かすものである」というような言葉があるのだ

が、つまり、身体が存在している、ということがすでに驚くべきことであるということだ。「俳優はアクター（＝行動する者）だ」という言葉があるが、行動するより先に、「存在している」ということの驚きを舞台で表現したい。まず、人間の身体が存在している、そして、その身体が動く。表現としては、それで十分なのではないかと思う。

そしてもうひとつ、普遍性の高いものを作りたいという願望もあった。言葉がなければ、言葉の伝わらない人々にも、理解してもらえないかもしれない。また登場人物の詳細を伝えることにより、誰もが余計なことを考えず、直感的にこの作品を見てくれるのではないかと思った。

誰かと関係をもとうとするが、誰とも関わることができない。近づこうとして拒否されることもある。本当は、他者から温もりをもらいたいのに、自分で自分に温もりを与えようとする。そこに、自分と関係を持つよう思ってくれる人が現れるかもしれない。その人が、自分にとって最も親しい人になるかもしれない。ところが、その人にとっての一番親しい人は、自分ではないかもしれない。それを知って、裏切られたと感じるかもしれないし、いたたまれなくなることもあるかもしれない。自分が親しくしてあげてた人が、ほかの誰かにとられてしまうこともあるかもしれない。そうして人間はひとりになっていくのかもしれない。誰も自分のために泣いてくれず、誰も自分のために笑ってくれず、幸せそうな人を見ては恨み、なぜ自分がこんな目にあわなければいけないかと思う一方、自分程度の間人はこんな目にあっても仕方がないと気づき、ただ「待つ」だけの存在となり、待てども待てども誰も来ず、ひからびて、自分の生に興味もなくなり、そのままじわじわ死にむかっていく。かもしれない。そういった不安と孤独を抱える人に、この作品を捧げたい。

2016年8月10日（水） 小佐部 明広

《上演記録》

劇団アトリエ第20回公演『蓑虫の動悸』

12日(土) 13時／19時
13日(日) 12時／16時

【キャスト】

私 ————— 城田笑美 (ELEVEN NINES)
男1 ————— 中村雷太
女1 ————— 英まさみ
女2 ————— むらかみなお (デンコラ)
男2 ————— 有田哲 (劇団アトリエ)
女3 ————— 秋山りな (デンコラ)
女4 ————— 遠山くるみ

【スタッフ】

演出・脚本 小佐部明広 (劇団アトリエ)
舞台監督 米沢春花 (NPO法人コンカリーニョ)
照明 高橋正和
音響 大江芳樹、小佐部明広
音楽 山崎耕佑 (Gh) (劇団 Fireworks)、柴田知佳 (Vo)、三浦莉奈 (Ed)、大竹祥平 (Gh)、神野ひかる (Gh)、日下拓人 (Ba)、佐藤麻斗 (Dr.)
衣装 松島みなみ
小道具・演出助手 茶野矢宵 (劇団アトリエ)
宣伝美術 八十嶋悠介 (TBGZ / マイペース)
制作 加納絵里香 (劇団800階)、後藤夏実

【日程】

2016年11月11日(金) 19時半

【会場】

生活支援型文化施設コンカリーニョ

【料金】

(前売) 一般 2000円
25歳以下 1500円
高校生以下 500円
(当日) 500円増／再観1000円

※実際の上演内容と一部異なる場合があります。ご了承ください。

2016年11月8日 第1刷制作
2017年10月4日 第2刷制作

《『蓑虫の動悸』の上演について》

「一般前売入場料2000円未満」または「公演予算100万円以下」の
場合は、脚本使用料は**無料**です。それ以外の場合は、協議の上、総予算の
3%程度を脚本使用料とします。上演のお問い合わせはクラック芸術堂企画
運営委員会まで。

【クラック芸術堂企画運営委員会】

clark.artcompany@gmail.com

